

カメレオン

2008(平成20)年5月26日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督=阪本順治／脚本=丸山昇一／出演=藤原竜也／水川あさみ／塩谷瞬／豊原功補／萩原聖人／平泉成／犬塚弘／谷啓／加藤治子／岸部一徳(東映配給／2008年日本映画／97分)

……『DEATH NOTE』でキラと夜神月の二面性を見事に演じ分けた藤原竜也が、今度は変幻自在に変化する「カメレオン」に挑戦！ イケメン詐欺師グループが目撃した拉致事件は、ヤクザ絡み？ それとも政治絡み……？
国会の証人喚問は茶番劇となることが多いが、さてこの映画では……？

あの企画が復元！ どんなカメレオンか？

去る5月2日に阪本順治監督の問題提起作『闇の子供たち』(08年)を観たばかりなのに、今日また同監督の『カメレオン』を観ることに。カメレオンは、周囲の環境に合わせて体の色を自在に変化させることができるトカゲ亜目、イグアナ下目、カメレオン科に属する動物だが、「カメレオンのような奴」という形容詞は誉め言葉、それともけなし言葉……？

ネット情報によると、昭和53年に松田優作の“遊戯シリーズ”第2作として『カメレオン座の男』というタイトルで企画されたものが、黒澤満プロデューサーの手によって復元したことによって、この映画が完成したらしい。そしてその主役は、松田優作とはタイプが全然異なるものの、「藤原くん以外にいなかった」とのことだ。

さて、『DEATH NOTE』ではキラと夜神月に扮し、人間の持つ二面性を見事に表現した藤原竜也が、変幻自在、多種多様なカメレオンのような男、野田伍郎をどのように演ずるのだろうか……？

藤原カメレオンのお手並み拝見！

教育上はよろしくないが、映画では詐欺師集団が登場することがよくある。そして、その手の映画は概して面白いから始末が悪い。

『カメレオン』の冒頭には、結婚詐欺のシーンが登場する。その新郎役は、今最も旬な俳優塩谷瞬だが、実はこれは、司会役の藤原竜也、ヤクザ役の豊原功補らのグループによる、大金持ちの女とその家を狙った立派な結婚詐欺。面白いのは、この若手イケメン詐欺師グループと、犬塚弘、谷啓、加藤治子というジジババ詐欺師グループががっちりスクラムを組んで、用意周到な詐欺に仕上げていることだ。

まずは、そんな藤原カメレオンの変幻自在ぶりのお手並み拝見から……。

■あの拉致事件はヤクザ絡み？ それとも政治絡み？

昭和53年当時新鋭だった脚本家丸山昇一の書いた「政府要人の拉致現場を目撃した詐欺師グループが、巨大な事件に巻き込まれていく物語」が日の目を見なかったのは、昭和48年の金大中事件の影響のためらしい。

しかし、国土交通省（旧建設省）を舞台とした政官財の癒着は、土建国家ニッポンのどうしようもない伝統（？）だから、その後始末に絡んだもみ消し事件や、国会に喚問請求をされた参考人や証人が突然行方不明になる事件はよくある話……？ 伍郎たちがあの日、あの場所で目撲したあの拉致事件は、単なるヤクザ絡み？ それとも国土交通大臣のクビに関連するような政治絡み……？

また、国会での証人喚問は「姉歯事件」の時のように大きな成果を生むこともあるが、茶番劇になる方が圧倒的に多い。しかして、この映画で国土交通大臣厚木義武（岸部一徳）の疑惑をめぐる国会での証人喚問の行方は……？

■占い女も詐欺師グループに……？

イケメン詐欺師グループとジジババ詐欺師グループだけでは色気ゼロになってしまう。そこで脚本上工夫されたのが、運に見放される中、1人で西洋占星術の占いをやっている若い女小池佳子（水川あさみ）の登場。ちょっと不思議な出会いを経て、佳子は伍郎たちの詐欺師グループに仲間入りすることに……。

もっとも私には、なぜ伍郎が佳子に近づいたのか？ なぜ伍郎が佳子を仲間に紹介したのか？ なぜ佳子を詐欺師グループに引き込んだのか？ が不明。さらに、問題がえらく深刻になった後、伍郎はなぜ佳子を大切に扱ったのか？ が不明。もっとも、それがわからないように行動するのが、カメレオンのカメレオンたる所以かもしれないが……？

そんな2人の仲は、コトが終わり、「ここで別れよう」と宣言しながら、その言葉とは裏腹に伍郎が佳子を抱きしめる状況になったからビックリ。まさか、この映画がこんなハッピーエンドで終わるはずはない……？ 案の定、阪本順治監督はその後さらにカメレオンの



© 2008 「カメレオン」製作委員会

ように変化していく伍郎の姿を描いていくから、その変幻自在ぶりはあなた自身の目で……。

【映画】ひょっとしてカメレオンは不死身……？

『闇の子供たち』は、『KT』（02年）や『亡国のイージス』（05年）に続く、社会派監督阪本順治の面目躍如たる全精力を傾注した力作だったが、『カメレオン』はいわばお遊び的作品……？ そんな言い方をするとスタッフや俳優陣に失礼かもしれないが、映画は所詮娯楽だから、私は悪い意味で「お遊び」と言っているのではないので、念のため……。

カメレオンは顔の表情の変化はもちろんだが、それ以上にあんな役でも、こんな役でも変幻自在にこなさなければならないから大変。したがって、「あるときは片目の運転手、またあるときは老巡査……しかししてその実体は、正義と真実の使徒、藤村大造だ！」というセリフが懐かしい、片岡千恵蔵演ずる『七つの顔』のようなパフォーマンスを必要とするケースも……？ もっとも、スクリーン上で見せる伍郎の格闘技や射撃術は実に見事なもの。また、クライマックスを迎える直前に、佳子と共にヤクザに狙撃され、とどめまで刺されたはずのカメレオン伍郎は、なぜか見事に復活！ こんなシーンを観ていると、「ひょっとしてカメレオンは不死身！」と思わざるをえないが……？

2008(平成20)年5月27日記

司法制度改革はこれでいいの？

1) 08年10月24日、私の事務所に「憲法と人権の日弁連をめざす会 若手有志」から「11. 25激増反対！ 全国弁護士集会へ」のFAXが届いた。「全国の弁護士、団結せよ！」「弁護士として生きさせろ！」「就職難は弁護士の自己責任じゃない！」という過激な見出で、弁護士増員の結果若手弁護士を襲っている現在の就職難、収入減の実態を示し、「今こそ誇りを持って激増ノーの意思を示そう！」とアピールしている。格差が広がる中、なぜか今若者たちの間では『蟹工船』ブーム。「弁護士界を『蟹工船』にさせるな！」のキャッチフレーズは少しうら哀しいが、良くも悪くもこれが1つの実態だ。

2) また08年10月23日付朝日新聞の「私の視点」は、「多様な人材登用はうそか」の見出で、東大法科大学院に入学したが、個人的な事情で受験を諦めた女性の意見を掲載した。彼女は法学部出身ではなく社会人から入学し3年間勉強する「未修者」の合格率が低いことを特に問題視し、「多様な法曹育成が阻まれている」と訴えるが、その実態は？

3) 他方、08年8月22日付朝日新聞は「法曹『年3000人』右往左往」の見出しで、司法改革の柱として6年前に閣

議決定した、司法試験合格者を年間3千人に増やす計画の迷走ぶりを報じた。また「問われる合格者の質」というテーマでは、「基本的な考え方方が身についていない」「実務法曹として求められる最低限の能力を習得していない」と厳しく批判した最高裁の調査結果の公表が衝撃的だ。また、08年10月20日付日経新聞は「弁護士就職 波高し」「法曹育成の道筋険しく」との見出で、法科大学院と新司法試験を軸とした法曹教育の先行きに不透明感が増している実態を報じた。

4) 法曹人口拡大に疑義を唱えていた鳩山邦夫から保岡興治への法相交代も大きなポイント。就任直後のインタビューを見れば、新司法試験の合格率が06年～08年で48.3%、40.2%、33%と順次低下する中、法科大学院統廃合は近い将来現実化するはずだ。他方、09年5月に施行される裁判員制度も不安がいっぱいで、私は数年後の廃止を大胆予測している。「市民のための司法」をキャッチフレーズとして1999年以降始まった100年に1度の大改革たる司法制度改革の到達点は残念ながらこんな有り様。ホントにこれでいいの？さて、その現状打開への道は？

2008（平成20）年10月25日記